

明治期愛知県における織物工場の地域的展開

中 島 茂

1. はじめに

筆者は前稿（2011）で『愛知県統計書』類を用いて、明治大正期における愛知県の織物生産動向を郡市別に分析した¹⁾。そこでは明治後期から大正中期にかけての「機業統計」と「織物生産統計」を整理して、愛知県内を四つの織物地域、すなわち、名古屋市とその周辺部（名古屋市・愛知郡・西春日井郡・東春日井郡）、尾張西部（丹羽郡・葉栗郡・中島郡・海東郡）²⁾、知多郡、三河地方（碧海郡・幡豆郡・額田郡・宝飯郡）に区分した。この時期は全体としてみれば、わが国の織物生産が工場生産を主体とした近代工業へと転換していく時期に当たり、愛知県内においても工場生産が急速に展開していく時期である。しかし、織物工場の地域的展開は、織物生産全体の地域的展開と基本的には類似した分布を示すとはいえ、より地域的な偏倚性を伴って現れ、郡市単位での分析ではその立地特性を十分に解明できないという問題がある。

近代期における愛知県の織物生産に関しては、古くは農商務省による調査報告があり³⁾、綿織物業の項目に知多地方、尾西地方、三河地方の3地域の調査報告が収められている。織物業に関しては経済史からの研究の蓄積があり、幕末期以降のマニュファクチュア生産の展開事例として尾西地域が取り上げられてきた⁴⁾。明治期に関しても塩沢君夫らによる一連の研究がある⁵⁾。尾西地域に関する地理学的研究としては、川崎敏による一連の研究があり⁶⁾、織物生産および織物工場生産の詳細な地理的展開状況が示されている。また、『一宮市史』⁷⁾や『尾西市史』⁸⁾など、個別自治体史を通じた詳細な調査研究がなされ、産地業界史の貴重な成果も認められる⁹⁾。しかし、近代期愛知県における織物工場の地理的展開に関して、その定量的で詳細な把握が正確に行われているわ

けではなく、地域的な実態把握になお課題が残されている。

筆者はこれまで明治大正期における大阪府南部の和泉地方を取り上げて、その織物工場分布の市町村、さらには大字単位での詳細な把握を行い、工場分布の地域的特性と農村の社会経済構造との関わりを検討してきた¹⁰⁾。本稿では同様の視点と方法論によって、明治期の愛知県における織物工場の地域的展開状況を当時の市町村別レベルで明らかにし、その地理的な分布特性を把握する¹¹⁾。明治期に限定した理由は紙数的制約によるところが多く、大正期に関しては別稿として検討したい。

本稿で用いる「個別工場一覧」については、1895（明治28）年～1906（明治39）年は『愛知県勸業年報』、1907（明治40）年～1911（明治44）年は『愛知県統計書』に所収の「工場表」を利用する。この時期には、1902（明治35）年、1904（明治37）年、1907（明治40）年、1909（明治42）年の4ヶ年にわたって、農商務省が刊行している『工場通覧』が利用できるが、これらは参考として用いるに留め、愛知県が刊行した資料に限定することで資料的統一を図った。なお、明治期の愛知県の市町村界に関しては、拙稿を参照されたい¹²⁾。以下の第2章では、分析に先立って、これらの「個別工場一覧」と既存の機業統計との照合を行い、その統計的な精度についての検討を行う。

2. 既存統計と「個別工場一覧」集計値との照合

明治期の愛知県における織物生産は、尾西地域を中心に機形態が広く展開し、織物工場主自体が織元として、多数の出機を有するが多かった。ここでは緻密な柄やデザインを追求した縞柄織物の手機生産がなお多く残存し、大阪府や知多木綿産地のように、力織機を用いた白木綿生産に特化した地域との明瞭な地域差となって現れていた。したがって、「工場生産」形態のみに限定されない当時の織物業地域のなかで、工場のみ分布形態にこだわることは実情を見誤る危険がある。しかし、多くの工場経営主が出機の織元的役割を担っていた以上、その分布が全体としての織物生産の地域的展開を象徴的に示していたとみることは可能である。そこで、この章では愛知県が刊行した資料から工場分布を分析するに先立って、利用する資料類における工場の捕捉状況を他

資料や統計数値と照合し、利用資料に関してその精度を確認しておきたい。

愛知県の刊行物に「個別工場一覧」が詳細に掲載されるようになるのは、1895（明治28）年版の『愛知県勸業年報』からである。その記載内容は『工場通覧』などとほとんど共通で、職工数10人以上の工場を対象に、業種別に工場名称、工場主名、所在地（市町村名までがほとんどで、大字まで記載のあるものは少ない）、主要製造品目、創業年月、男女別職工数、原動機種類別使用台数、同馬力数である。ただし、原動機台数の記載は1906（明治39）年以降、同馬力数の記載は翌1907（明治40）年以降の資料に限られている。

まず、明治後期に刊行の始まった『工場通覧』との「個別工場一覧」どうしでの照合を行っておこう。第1表は『工場通覧』の刊行された1902年、1904年、1907年、1909年の4カ年分を取り上げたものである。工場数では1902年調査の工場把握で、『工場通覧』側が14工場多く、当該4年間のなかで最大の差となっているが、原動機を使用する工場に関して、『工場通覧』の16工場に対し、愛知県資料では7工場と差異が目立っている。1904年の愛知県資料では原動機使用に関する記載がなく、調査漏れであるのか、記載漏れであるのかはわからないが、県資料の精度に課題がみえている。また、1907年では工場数で県資料の方が若干多くなっているものの、職工数では県資料の方が1,500人程度少なくなっており、紡績工場の兼営織布の扱いなど、大規模工場の把握もしくは分類の差が反映している可能性がある。1909年は『工場通覧』が職工数5人以上を調査対象とした唯一の年次¹³⁾で、県資料でも5人以上の工場を

第1表 『工場通覧』と『愛知県統計書』類「個別工場一覧」との照合

	『工場通覧』			「県統計書」		
	工場数	動力工場	職工数	工場数	動力工場	職工数
1902年	257	16	6,431	243	7	6,606
1904年	254	21	7,357	246	…	7,323
1907年	339	71	12,082	341	74	10,570
1909年 (a)	491	175	13,647	478	171	13,573
1909年 (b)	313	20	2,123	317	25	2,157

注) 職工数10人以上の工場に関する愛知県総数。単位は（戸）、（人）で、動力工場は工場数の内数。1909年 (a) は職工数10人以上分、同年 (b) は職工数5人～9人分を示す。

出典) 当該年の『工場通覧』および『愛知県勸業年報』、『愛知県統計書』より作成

記載しており、両資料間の差異は比較的小さいとみなしうる。以上から、県資料の側には精度に若干の課題はあるものの、おおむね『工場通覧』と同程度の工場把握が行われているとみてよいだろう。

つぎに、『愛知県勸業年報』や『愛知県統計書』（以下、まとめて「県統計書」と略称する）に掲載をみる「機業統計」と「個別工場一覧」の集計値とを照合してみよう。機業戸数や職工数、織機台数を示す「機業統計」は、愛知県の場合、1894（明治27）年以降の「県統計書」に継続的に記載されるが、「工場」、「家内工業」、「織元」、「賃織業」といった生産形態別の数値が記載されるのは1904年以降のことで、これは農商務省の「農商務統計様式」に基づいたものである。そこで、第2表に「機業統計」において職工数10人以上の機業経営体を示す「工場」の数値（工場数、職工数）を1904年から明治末の1911（明治44）年まで掲げ、該当する年次の「個別工場一覧」の集計値を併記した。両資料の数値は、対象が職工数10人以上という点で一致するものの、「機業統計」が織物生産の実態把握の一環であるのに対して、「個別工場一覧」は「工場」という事業所の把握を目的としており、性格が異なっているため、厳密には比較が困難なものである。たとえば、職工数10人以上を対象とするとしても、「個別工場一覧」は当該年の12月31日現在でとらえた数値であるのに対して、機業戸数統計の把握は特定期日によらず、年平均などの数値によってい

第2表 機業統計と個別工場一覧との照合

	機業統計		個別工場一覧	
	工場数	職工数	工場数	職工数
1904年	308	7,105	246	7,323
1905年	285	8,244	249	7,472
1906年	365	8,670	286	8,931
1907年	376	9,625	341	10,570
1908年	445	11,566	398	11,699
1909年	647	15,856	478	13,573
1910年	697	16,145	405	11,367
1911年	658	17,805	550	16,530

注)「工場」は職工数10人以上のもの、機業統計のうち、1906年以前は毛織物工場を含まない。

出典)『愛知県勸業年報』、『愛知県統計書』より作成

る。また、出機、内機の数え方如何によっても、工場の規模は大きく異なってくるため、その単純な比較には留意する必要がある。

そのうえで第2表をみると、総じて、「機業統計」の側の工場数が多い傾向が見られ、年代が下るほどその差が大きくなる傾向にある。1904年には60工場程度の差異であったものが、1910年では300近い数値の開きが生じている。ただし、職工数では年次による違いはあるものの、1908年頃までは「個別工場一覧」の集計値の方が多い傾向にある。1910年の「個別工場一覧」は職工数でも「機業統計」にくらべて極端に少なく、同年の「個別工場一覧」の工場把握精度には問題がありそうである。両資料間には工場数の把握に注意すべき差異があるものの、職工数に関しては、1910年など特定の年次を除き、比較的近似した数値を示している。大まかな傾向として、「個別工場一覧」の集計値が「機業統計」の工場数を下回っていることは、単純に「個別工場一覧」の工場捕捉率の悪さというよりも、各年末現在における職工数10人以上という基準設定によって、記載対象外となっている「工場」が一定数存在していることを暗示しているとみられる。これは第1表における1909年の職工数5～9人規模の工場（機業統計では「家内工業」に分類されるもの）の多さからも想定される点である¹⁴⁾。

以上のように、愛知県における職工数10人以上の「工場」の把握について、「個別工場一覧」は一定基準を満たした工場の大部分を捕捉しているとみなしてよいだろう。既存の機業統計では郡市別の数値しか得られないことに比べて、「個別工場一覧」からは少なくとも市町村ごとの分布動向を把握することができ、織物工場分布に関する詳細な地域的傾向や特性を示すことが可能である。以下ではその具体的な工場分布動向を見ていこう。

3. 郡市別・種類別織物工場・職工数の分布動向

(1) 全県の動向

まず、明治期の愛知県に関して「個別工場一覧」が利用可能な1895（明治28）年～1911（明治44）年を織物種類別¹⁵⁾に全県集計値から概観しておこう（第3表）。1895年における愛知県内の織物工場数は109工場を数え、工場職工

第3表 愛知県の織物種類別工場数・職工数年次動向（1895年～1911年）

	総数		絹織物		絹綿交織		綿織物	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
1895年	109 (-)	4,488	1 (-)	108	16 (-)	2,379	89 (-)	1,771
1896年	109 (-)	4,035	6 (-)	191	16 (-)	927	74 (-)	1,736
1897年	103 (2)	5,143	6 (-)	125	22 (-)	2,038	62 (2)	1,175
1898年	119 (2)	6,152	4 (-)	190	43 (1)	3,308	57 (-)	1,446
1899年	173 (-)	7,736	6 (-)	296	78 (-)	3,966	79 (-)	1,792
1900年	255 (12)	7,838	19 (1)	635	74 (3)	2,950	142 (8)	2,992
1901年	198 (13)	5,763	15 (-)	283	63 (1)	1,931	106 (10)	2,311
1902年	243 (7)	6,606	15 (-)	297	90 (-)	2,895	127 (6)	2,426
1903年	207 (19)	5,852	19 (-)	386	54 (3)	1,980	117 (15)	2,614
1904年	246 …	7,323	20 …	392	35 …	1,254	176 …	4,826
1905年	249 (18)	7,472	18 (-)	430	47 (1)	1,428	160 (16)	4,223
1906年	286 (42)	8,931	21 (-)	426	38 (1)	1,503	204 (40)	6,048
1907年	341 (74)	10,570	25 (2)	748	54 (1)	1,444	225 (67)	6,175
1908年	398 (111)	11,699	43 (-)	1,002	47 (2)	1,418	262 (106)	7,119
1909年	478 (171)	13,573	41 (2)	1,005	53 (1)	1,923	320 (165)	8,488
1910年	405 (191)	11,367	25 (3)	657	57 (2)	1,520	285 (184)	7,623
1911年	550 (252)	16,530	42 (3)	1,286	100 (3)	2,709	369 (241)	10,019

注) 単位は (戸)、(人)。工場数欄のカッコ内は原動機使用工場数 (内数)。その他には分類不明分を含む。…はデータなし、-はゼロを示す。

出典) 1906年までは各年の『愛知県勸業年報』、1907年以降は各年の『愛知県統計書』より作成

数は4,488人となっているが、まだ原動機を使用する工場はみられない。織物種類別でみると、工場数では綿織物工場が89工場と大部分を占め、これに絹綿交織物工場の16工場が続いている。職工数では絹綿交織の2,379人が最も多く、綿織物は1,771人ととどまる。1工場当たり平均規模では綿織物の19.9人に対して、絹綿交織は148.7人と、明瞭な規模の差がみられる。総じて綿織物工場には小規模なものが多く、絹綿交織工場は大規模なものが多いが、翌1896年になると、絹綿交織の職工数が激減して、その平均規模は57.9人に縮小する一方、綿織物のそれは23.5人となって、3倍足らずの差にとどまっている。ただし、規模の大きな工場がその年の製造品目によって別の項目に移行していることもあるため、織物種類間の数値比較には注意が必要である。年次動

毛織物		その他	
工場数	職工数	工場数	職工数
- (-)	-	3 (-)	230
- (-)	-	13 (-)	1,181
- (-)	-	13 (-)	1,805
- (-)	-	15 (1)	1,208
2 (-)	1,543	8 (-)	139
2 (-)	282	18 (-)	979
1 (-)	17	13 (2)	1,221
1 (-)	38	10 (1)	950
2 (-)	135	15 (1)	737
2 …	75	13 …	776
3 (-)	175	21 (1)	1,216
3 (1)	205	20 (-)	749
5 (-)	348	32 (4)	1,855
7 (1)	613	39 (2)	1,547
8 (3)	1,007	56 (-)	1,150
9 (1)	680	29 (1)	887
18 (2)	1,154	21 (3)	1,362

向を見ると、年によって増減があるものの、全体としては織物工場は急速に増加し、1900年以降はおおむね200工場台、1907年以降は300～400工場台に達し、1911年には550工場を数えている。職工数もほぼ同様の動向を示し、1907年以降は1万人台になって、1911年には16,530人に達している。同年の1工場当たり平均職工数は30.1人で1895年の41.2人より小さくなっており、小規模な工場の増加が顕著であったことがわかる。また、原動機使用工場は1897年に初めて登場し、その後じょじょに増加して、1911年には252工場を数え、46.0%の工場が動力化している。

1911年の状況を織物種類別構成からみると、綿織物工場が全体の67.3%を占め、これに次ぐ絹綿交織の18.1%（99工場）を大きく引き離している。毛織物工場

は1899年に初めて2工場登場して以降、じょじょに増えてきたが、1911年になって前年からほぼ倍増し17工場を数えている。絹織物、絹綿交織とも、この間に工場数はかなり増加してきているが、絹綿交織に関しては、工場数の増加の割には職工数はほとんど増加しておらず、1911年の1工場当たり平均職工数は27.1人となって、綿織物工場の27.2人と同規模にとどまっている。ちなみに同年の絹織物工場の平均職工数は30.6人、毛織物工場は66.0人、その他の工場は64.9人となっている。

同年の原動機使用工場の内訳は、綿織物工場が241工場と原動機使用工場全体の95.6%を占め、綿織物工場全体の65.3%が原動機を使用するに至っている。しかし、そのほかの織物ではこの時点でも原動機使用工場はそれぞれ2～3工

場をみるにとどまり、ほとんど動力化が進展していない。尾西地方をはじめ、三河木綿でも伝統的な縞製品を主体とする産地での力織機の導入が大きく立ち後れていることがわかる。この時期にあつては、高品質の縞柄織物の安定した製造には、熟練した職工（女工）による手機生産がなお不可欠で、出機と結び付いた織元－賃織関係の持続が、賃織業者数（基本的には農家婦女子による副業）の減少を抑制し、原動機使用工場の増加を阻んでいたとみられる。

(2) 尾張地方の郡市別動向

つぎに、尾張地方1市9郡の動向をみてみよう（第4表）。年にもよるが、愛知県における織物工場の8割前後が尾張地方に立地しており、工場職工数についてはさらに尾張地方への集中度が高くなっている。1895年時点で織物工

第4表 尾張地方における郡市別織物工場数・職工数の年次動向

	尾張計		名古屋市		愛知郡		東春日井郡		西春日井郡		丹羽郡		葉栗郡	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
1895年	90	3,995	29	1,592	-	-	-	-	-	-	-	-	1	90
1896年	80	3,250	30	1,622	2	23	-	-	-	-	1	20	7	177
1897年	77	4,696	29	2,549	2	23	-	-	-	-	1	20	8	191
1898年	98	5,755	18	2,315	4	96	-	-	-	-	1	20	9	237
1899年	143	7,230	14	2,422	2	25	-	-	-	-	1	14	32	916
1900年	223	7,276	39	2,436	1	14	1	17	1	31	9	132	41	933
1901年	159	5,091	26	1,924	1	13	-	-	-	-	11	191	27	561
1902年	195	5,821	20	1,552	1	12	-	-	2	65	7	124	30	635
1903年	168	5,169	23	1,527	-	-	-	-	1	42	13	183	25	444
1904年	203	6,521	52	2,819	2	35	-	-	-	-	13	225	19	376
1905年	215	6,797	63	2,832	5	154	-	-	1	25	13	251	14	332
1906年	240	7,939	58	2,718	6	240	1	73	3	96	22	431	19	459
1907年	291	9,391	75	3,588	9	216	1	83	5	447	27	657	21	497
1908年	340	10,259	94	3,358	11	269	1	97	5	523	33	846	19	435
1909年	388	11,571	87	3,568	8	234	2	111	4	164	40	1,139	25	546
1910年	308	9,144	44	1,899	10	313	1	93	3	146	41	1,288	19	420
1911年	447	13,946	113	4,700	13	587	1	94	13	376	45	1,355	21	490

注) 単位は(戸)、(人)。

出典) 第3表に同じ

場が所在する郡市は、名古屋市、葉栗郡、中島郡、知多郡の1市3郡にとどまるが、知多郡にはすでに40工場、名古屋市に29工場、中島郡に20工場を数えている。職工数では中島郡の1,696人が最も多く、名古屋市が1,592人でこれに並び、知多郡は617人と前記2郡市の半分以上にすぎない。すなわち、知多郡の1工場当たり平均職工数は15.4人と小規模なものが多く、中島郡の84.8人や名古屋市の54.9人との間に工場規模に大きな違いがみられる。翌年以降、愛知県や丹羽郡にも織物工場が現れ、1906年以降は尾張地方の全郡市に織物工場をみるが、1911年の工場分布も基本的には知多郡、名古屋市、中島郡を核に、その周辺部への地理的展開がみられるという構図になっている。ただし、地理的な展開という意味では、中島郡を中心とする尾西地方が丹羽郡まで含めて、最も広範囲な広がりを示し、名古屋市が愛知県、西春日井郡への比較的限られ

た展開にとどまるが、知多郡はほぼ郡内での展開が中心で、尾張地方の他郡市からは切り離された展開である。

中島郡		海東郡		海西郡		知多郡	
工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
20	1,696	-	-	-	-	40	617
17	1,080	-	-	-	-	23	328
18	1,649	-	-	-	-	19	264
49	2,808	3	38	-	-	14	241
71	3,469	6	81	-	-	17	303
109	3,283	8	115	2	61	12	254
73	1,921	6	87	2	60	13	334
111	2,895	3	61	2	66	19	411
86	2,365	2	70	1	57	17	481
85	2,192	12	224	2	112	18	538
85	2,343	14	292	3	107	17	461
91	2,780	20	475	5	124	15	543
100	2,537	16	415	4	96	33	855
108	2,714	17	466	4	84	48	1,467
116	3,057	19	607	8	134	79	2,011
79	2,329	12	250	4	64	95	2,342
95	2,766	20	491	4	79	122	3,008

1911年の展開をもう少し詳しくみておくと、郡市別工場数では知多郡の122工場が最も多く、名古屋市の113工場と中島郡の95工場がこれに続いている。職工数では名古屋市の4,700人が最も多くなり、知多郡の3,008人、中島郡の2,766人がこれに続くが、とりわけ、知多郡の1907年以降の職工数増加が目立っている。名古屋市も同時期に増加傾向が顕著であるが、年によって変動幅が大きく、これは兼営織布を行う大規模な紡績工場の「個別工場一覧」で

の取扱いが、年によって異なることなどによっている¹⁶⁾。これらのほか、丹羽郡の45工場1,355人、葉栗郡の21工場490人、海東郡の20工場491人、愛知郡の13工場587人が主な郡である。主要郡市の平均職工数規模は、名古屋市の41.8人、愛知郡の45.2人、丹羽郡の30.1人、葉栗郡の23.3人、中島郡の29.1人、海東郡の24.6人、知多郡の24.7人となっており、1895年当時と比べて、郡市間の規模格差は縮小してきている。名古屋市とその周辺部で平均規模が大きくなっている以外、知多郡を含む他の郡部では比較的近似したものとなっているが、名古屋市や愛知郡の場合、会社組織の大規模な織布工場などが含まれているため、それらを除けば、郡市間の明瞭な工場規模の差はあまり目立たないことになる。

上述の地域的まとまりとしてみた場合、1911年における名古屋市とその周

第5表 三河地方における織物工場数・職工数の年次動向

	三河計		豊橋市		碧海郡		幡豆郡		額田郡	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
1895年	19	493	…	…	—	—	1	32	7	313
1896年	29	785	…	…	2	165	3	93	7	243
1897年	26	447	…	…	4	53	4	70	5	103
1898年	21	397	…	…	1	12	5	102	4	91
1899年	30	506	…	…	1	33	10	163	4	90
1900年	32	562	…	…	2	42	6	99	3	78
1901年	39	682	…	…	3	66	6	99	3	58
1902年	48	785	…	…	8	181	7	130	1	10
1903年	39	683	…	…	9	193	5	103	3	60
1904年	43	802	…	…	6	142	11	183	2	27
1905年	34	675	…	…	5	101	8	192	4	136
1906年	46	992	1	29	8	174	8	250	5	173
1907年	50	1,179	1	31	8	159	8	191	8	211
1908年	58	1,440	3	84	12	234	14	368	11	312
1909年	90	2,002	4	111	19	420	17	569	21	468
1910年	98	2,251	4	114	24	510	21	599	26	673
1911年	103	2,584	4	96	24	644	21	672	34	818

注) 単位は (戸)、(人)。豊橋市は1906年の市制施行で、それ以前は渥美郡に属した。西加茂郡、北設楽郡、八名郡にはこの間織物工場の記載はない。

出典) 第3表に同じ

辺部（愛知郡、西春日井郡）の集計値は139工場5,663人、尾張西部（中島、丹羽、葉栗、海東、海西5郡）は、185工場5,181人で、知多郡は1郡でひとつのまとまりをなしている（見方によっては三河地方の碧海郡などとのまとまりを考えうるかもしれない）。これらの地理的まとまりの詳細な検討は次章で行う。

(3) 三河地方の郡市別動向

三河地方の郡市別動向は第5表に示したが、1895年～1911年の間に西加茂、北設楽、八名の3郡には織物工場はみられないため、この3郡については表からは省いた。また、東加茂、南設楽の2郡でも1～2工場がこの間断続的にみられるのみである。なお、豊橋市は1906年8月の市制施行で、それまでは豊

東加茂郡		南設楽郡		宝飯郡		渥美郡	
工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
-	-	-	-	11	148	-	-
-	-	-	-	17	284	-	-
-	-	1	12	11	189	1	20
-	-	-	-	10	172	1	20
-	-	-	-	14	208	1	12
-	-	-	-	19	317	2	26
-	-	1	28	25	417	1	14
-	-	2	28	30	436	-	-
-	-	-	-	22	327	-	-
-	-	2	132	21	306	1	12
-	-	1	16	16	230	-	-
-	-	1	12	22	335	1	19
-	-	1	218	22	313	2	56
1	14	2	207	14	201	1	20
1	11	-	-	24	345	4	78
1	10	-	-	18	276	4	69
-	-	-	-	17	278	3	76

橋町として渥美郡に属していた。三河地方全体としては、1895年の19工場493人から1911年の103工場2,584人へ年による増減をみながらも傾向としては増加してきていることがわかる。とくに1906年以降の急速な増加が目立っている。工場数についてみると、1895年時点では宝飯郡の11工場、額田郡の7工場、幡豆郡の1工場と、三河地方中南部から東部にかけての分布が中心であった。ただ、職工数では宝飯郡は148人にとどまり、額田郡の313人の半数以下で、ひじょうに小規模な織物工場ばかりであった。こののち、1905年頃までは工場数、職工数とも停滞的で増減を繰り返していたが、その後は碧海郡、幡豆郡、額田郡を中心にある程度まとまった工場分布がみられるようになる。1911年時点では額田郡の34工場818人を筆頭に、碧海郡の24工場644人、幡豆郡の21工場672人がこれに続いている。宝飯郡も17工場278人をみるが、工場数、職工数ともこの間停滞的に推移するにとどまった。むしろ、絶対数は少ないものの、東三河の豊橋市を含む渥美郡域で増加傾向が認められる。

1911年の郡市別にみた1工場当たり平均職工数では、豊橋市24.0人、碧海郡26.8人、幡豆郡32.0人、額田郡24.1人、宝飯郡16.4人、渥美郡25.3人、三河地方平均では25.1人となっている。幡豆郡の32人と宝飯郡の16人の間にほぼ2倍の開きがあるが、全体としては比較的近似した平均規模を示している。尾張地方の平均値31.2人よりもやや小規模であるが、比較的規模の大きい名古屋市とその周辺部や零細規模の工場が多い宝飯郡を除けば、尾張と三河の間に明瞭な工場規模の差が認められるわけではない。両地方の差は出現した織物工場の明瞭な絶対数の差であり、尾張地方の中島郡1郡で三河地方全体の工場生産規模をほぼ凌駕しているのである。

以上の郡市別分布動向の概観的分析を踏まえて、以下では名古屋市とその周辺部、尾張西部、知多地方、三河地方（碧海、幡豆、額田、宝飯4郡を中心に）の愛知県内4地域に焦点を当てながら、より詳細な織物工場の分布動向をみることにしよう。

4. 主要産地における市町村別織物工場・職工数の分布動向

ここでは前章および掲掲1) 拙稿の検討で、愛知県内を四つの織物地域に区分したことを受けて、これらの地域に焦点を当てながら、明治後期の愛知県における織物工場の地域的展開を市町村単位での分布動向から分析する。1895年～1911年を逐年でみると煩雑となるため、ここでは1896(明治29)年、1901(明治34)年、1906(明治39)年、1911(明治44)年の5年ごとの分布変化を分析する。これらの年次は時代状況として、明治20年代後半、明治30年代前半、同後半、明治40年代の各時期を代表させているが、各年固有の事情もあるため、必要に応じて他の年次についても触れることがある。

(1) 1896年の状況

1896年の郡市別に整理した状況は第6表に示したが、この年に関しては工場数は前年と同数ながら、職工数は前後の年に比べてかなり少なくなっている。とくに絹綿交織の職工数が少なく、それを一定数補完する形でその他に含まれる分が多いものの、日清戦争後の不況が影響しているかもしれない。この

第6表 愛知県の郡市別・織物種類別工場数・職工数(1896年)

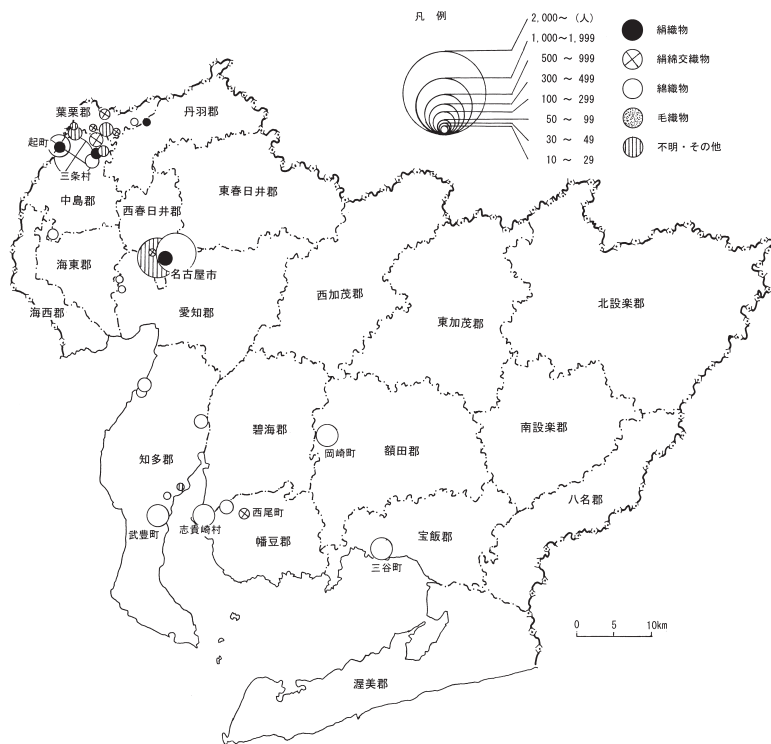
	総数		絹織物		絹綿交織		綿織物		毛織物		その他	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
愛知県計	109 (-)	4,035	6 (-)	191	16 (-)	927	74 (-)	1,736	- (-)	-	13 (-)	1,181
名古屋市	30 (-)	1,622	3 (-)	87	1 (-)	18	19 (-)	534	- (-)	-	7 (-)	983
愛知郡(2)	2 (-)	23	- (-)	-	- (-)	-	2 (-)	23	- (-)	-	- (-)	-
丹羽郡(1)	1 (-)	20	1 (-)	20	- (-)	-	- (-)	-	- (-)	-	- (-)	-
葉栗郡(6)	7 (-)	177	- (-)	-	4 (-)	88	1 (-)	12	- (-)	-	2 (-)	77
中島郡(7)	17 (-)	1,080	2 (-)	84	10 (-)	787	2 (-)	100	- (-)	-	3 (-)	109
知多郡(6)	23 (-)	328	- (-)	-	- (-)	-	22 (-)	316	- (-)	-	1 (-)	12
碧海郡(1)	2 (-)	165	- (-)	-	- (-)	-	2 (-)	165	- (-)	-	- (-)	-
幡豆郡(2)	3 (-)	93	- (-)	-	1 (-)	34	2 (-)	59	- (-)	-	- (-)	-
額田郡(1)	7 (-)	243	- (-)	-	- (-)	-	7 (-)	243	- (-)	-	- (-)	-
宝飯郡(1)	17 (-)	284	- (-)	-	- (-)	-	17 (-)	284	- (-)	-	- (-)	-

注) 単位は(戸)、(人)。郡名欄のカッコ内は織物工場のある町村数。工場数欄のカッコ内は原動機使用工場数(内数)。その他には分類不明分を含む。-はゼロを示す。表記以外の郡には工場なし。

出典)『愛知県勸業年報』(明治29年版)より作成

時期には原動機を使用する織物工場はまだなく、また、毛織物工場も現れていない。

全県で109工場4,035人のうち、1市9郡（27町村）に織物工場が所在し、このうち、名古屋市が30工場1,622人と最大である。これに中島郡の17工場1,080人、知多郡の23工場328人、宝飯郡の17工場284人が続いている。知多郡と宝飯郡には小規模な工場が多く、中島郡の工場規模は比較的大きい。郡別では中島郡の7町村、葉栗郡と知多郡の各6町村に織物工場をみるが、その他の郡では1～2町村に工場をみるにとどまっている。その織物種類別職工数に関する町村別分布をみると（第1図）、名古屋市1市で大きな職工数の集積を示しているが、周辺の愛知郡では岩塚村と御厨村に1工場ずつ織物工場をみる



第1図 愛知県における織物工場職工数の市町村別分布（1896年）

注）凡例は第1図～第4図に共通する。

資料）『愛知県勸業年報』（明治29年版）所収「工場表」より作成

ものの、この時期では名古屋市域を越えた工場分布の広がりはまだみられない。

織物工場の地域的集積という点では、中島郡を中心とした葉栗郡から丹羽郡古知野町へかけての織物工場の展開がすでに顕著であることがわかる。町村別では中島郡三条村に絹綿交織を中心とした7工場517人、起町に3工場228人の大きな集積があり、一宮町と奥町に各2工場、神戸村、三輪村、六輪村に各1工場をみて、絹織物、綿織物、その他と多様な種類を伴う工場生産の展開がみられる。葉栗郡では浅井村、太田島村、黒田町、光明寺村、玉ノ井村、飛保村の6町村に織物工場をみるものの、浅井村の2工場以外はすべて1工場ずつの所在で、まだ散発的である。一方、知多郡での織物工場の展開もまだ散発的であるが、武豊町の7工場115人、亀崎町の6工場84人、横須賀町の5工場60人などが比較的まとまっており、養父村に3工場、半田町と成岩町に各1工場をみる。

三河地方では、碧海郡志貴崎村から隣接する幡豆郡西尾町、中畑村へかけて1～2工場ずつの織物工場があり、弱いまとまりがみられる。額田郡では岡崎町1町で7工場243人、宝飯郡では三谷町で17工場284人を数えるが、郡内各地への展開という状況はみられない。この時期、町村別でみて三谷町への織物工場の集中は、愛知県内においては特異な状況である。同町は三河湾に面した近世以来の漁港を擁し、蒲郡に隣接する町である。

(2) 1901年の状況

1901年の愛知県全体の織物工場数は198工場で、職工数は5,763人、このうち原動機使用工場は13工場を数える。同年は前後の年に比べて工場数、職工数とも2割前後少なく、それまでの増加傾向が数年間の横ばい状態に入る年に当たっている。この年は山陽鉄道（現 JR 山陽本線）の全通や官営八幡製鉄所の操業開始など、近代的産業・社会基盤の整備が進められる一方で、経済不況が深刻化した時期でもあり、東海地方でも銀行の取付騒動や倒産などがあって、こうした経済的混乱が機業経営にも影響を与えていたとみられる。そうしたなかで、まだ数少ないとはいえ、原動機使用工場（すなわち、力織機を導入

した工場)が愛知県内でもじょじょに増加し始めている。

織物工場を郡市別にみると、県内1市13郡(56町村)に所在しているが(第7表)、織物工場の所在する町村数は5年前に比べて倍増している。工場数では中島郡の73工場が飛び抜けて多く、葉栗郡の27工場、名古屋市の26工場、宝飯郡の25工場がほぼ横並びで続いている。職工数では名古屋市の1,924人と中島郡の1,921人が抜きん出ており、葉栗郡の561人、宝飯郡の417人、知多郡の324人がこれらに続いている。織物種類別では綿織物が106工場、2,311人で最も多く、絹綿交織の63工場、1,931人がこれに次いでいる。毛織物工場は1899(明治32)年に初めて2工場現れるが、1901年には海東郡に1工場をみるのみである。綿織物工場は13郡中12郡に所在しており、中島郡の30工場、450人、宝飯郡の24工場、403人、名古屋市の14工場、721人、知多郡の11工場284人などが主なものである。名古屋市の場合は「その他」に7工場1,099人を数えるが、この中にも綿織物が含まれていると思われる。絹綿交織工場は

第7表 愛知県の郡市別・織物種類別工場数・職工数(1901年)

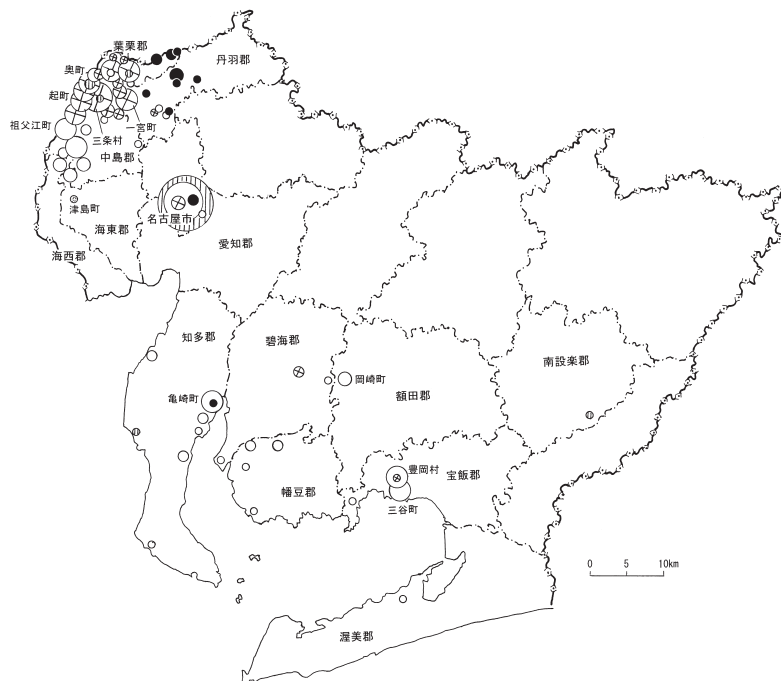
	総数		絹織物		絹綿交織		綿織物		毛織物		その他	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
愛知県計	198(13)	5,763	15(-)	283	63(1)	1,931	106(10)	2,311	1(-)	17	13(2)	1,221
名古屋市	26(4)	1,924	2(-)	37	3(-)	67	14(2)	721	-(-)	-	7(2)	1,099
愛知郡(1)	1(-)	13	-(-)	-	-(-)	-	1(-)	13	-(-)	-	-(-)	-
丹羽郡(6)	11(-)	191	7(-)	136	1(-)	20	3(-)	35	-(-)	-	-(-)	-
葉栗郡(9)	27(1)	561	5(-)	94	17(-)	383	4(1)	74	-(-)	-	1(-)	10
中島郡(17)	73(3)	1,921	-(-)	-	40(1)	1,411	30(2)	450	-(-)	-	3(-)	60
海東郡(2)	6(-)	87	-(-)	-	-(-)	-	5(-)	70	1(-)	17	-(-)	-
海西郡(1)	2(-)	60	-(-)	-	-(-)	-	2(-)	60	-(-)	-	-(-)	-
知多郡(7)	13(4)	324	1(-)	16	-(-)	-	11(4)	284	-(-)	-	1(-)	24
碧海郡(3)	3(-)	66	-(-)	-	1(-)	36	2(-)	30	-(-)	-	-(-)	-
幡豆郡(4)	6(1)	99	-(-)	-	-(-)	-	6(1)	99	-(-)	-	-(-)	-
額田郡(1)	3(-)	58	-(-)	-	-(-)	-	3(-)	58	-(-)	-	-(-)	-
南設楽郡(1)	1(-)	28	-(-)	-	-(-)	-	-(-)	-	-(-)	-	1(-)	28
宝飯郡(3)	25(-)	417	-(-)	-	1(-)	14	24(-)	403	-(-)	-	-(-)	-
渥美郡(1)	1(-)	14	-(-)	-	-(-)	-	1(-)	14	-(-)	-	-(-)	-

注) 前表に同じ。

出典『愛知県勸業年報』(明治34年版)より作成

中島郡に40工場、1,411人と多く、隣接する葉栗郡の17工場、383人と合わせて、尾西地域に集中していることがわかる。絹織物はそれほど多くはないが、丹羽郡と葉栗郡に集まっている。

町村別では中島郡で17町村に織物工場が所在し、当時の郡内55町村のほぼ3分の1を占めているが、葉栗郡では9町村と、全14町村のほぼ3分の2に及んでいる。知多郡の7町村と丹羽郡の6町村がこれらに次いでいる。町村別職工数分布については第2図に示したが、全体として尾張西部、とりわけ尾西地域の集積度が高まり、その分布範囲が拡大していることがわかる。中心となる中島郡では、領内村に12工場と最も多く、祖父江町の9工場、三条村の8工場、小信中島村の7工場、起町と奥町¹⁷⁾の各6工場などが工場数の多い町村である。職工数でみると、三条村の407人が最も多く、一宮町（4工場）の246人、奥町の231人のほか、領内村（168人）、小信中島村（144人）、祖父江



第2図 愛知県における織物工場職工数の市町村別分布（1901年）

資料)『愛知県勤業年報』(明治34年版)所収「工場表」より作成

町（120人）、起町（112人）、祐賀村（100人）で100人以上を数える。織物種類はほぼ祖父江村より南では綿織物に特化し、祖父江町の北隣の祐賀村以北では絹綿交織に特化して、地域分化が明瞭である。原動機使用工場は奥町、祖父江町、下津村に各1工場をみるが、機数、馬力数は不詳で、奥町では絹綿交織を、他の2町村では綿織物を製造している。

中島郡の北隣の葉栗郡では、全27工場中、10工場が黒田町に所在し、太田島村¹⁸⁾に5工場、玉ノ井村に4工場、小鹿村に3工場をみるが、そのほかの5村には各1工場をみるのみである。職工数でも、黒田町の190人、太田島村の134人、玉ノ井村の89人が多く、ほかは50人未満である。原動機使用工場は玉ノ井村の1工場のみである。織物種類別では郡東部の丹羽郡に隣接する草井、小鹿、宮田3村で絹織物となっているほかは、絹綿交織か、一部綿織物の工場で占められ、これも地域的な分化が明瞭にみられる。

一方、丹羽郡では11工場191人の大半が絹織物工場であるが、旭村の3工場66人と幼村の3工場36人、青木村の2工場31人が主なもので、そのほかの3村には各1工場をみるのみである。郡南西部の中島郡に近い幼村や青木村で綿織物や絹綿交織の工場がみられるが、そのほかはすべて絹織物工場である。原動機使用工場はまだ現れていない。他方、中島郡の南側に位置する海東郡と海西郡では、まだ織物工場の数それ自体が少ないが、すべて両郡の北部に所在し、中島郡の領内村や左右川村に近い海東郡川淵村（5工場70人）や海西郡開治村（2工場60人）で綿織物を製造しており、上述の中島郡の村々とひとまとまりの集積地を形成している。このほか、津島町に毛織物工場が1工場17人みられ、個別工場一覧では、片岡孫三郎を工場主とする1899年7月創業の片岡毛織工場である¹⁹⁾。

こうした尾張西部における織物工場の分布範囲の拡大に対して、名古屋市とその周辺部ではこの5年間に大きな変化はなく、名古屋市自体は1896年と比べて、工場数では4工場の減少、職工数では約300人の増加にとどまっている。愛知郡では綿織物工場が千種町の1工場13人のほか、猪子石村にも1工場をみるが、職工数は不明である。全体として、この地域での織物工場の分布拡大はまだみられない。また、知多郡では7町村に13工場、324人をみるが、これ

も1896年に比べて、工場数では10工場の減少、職工数では大きな増減がみられず、大きな分布の広がりはみられない。なお、同郡では亀崎町に所在する絹織物1工場を除いて、他はすべて綿織物工場である。

最後に三河地方をみると、この5年間で織物工場は29工場から39工場へ増加し、所在町村数も5町村から13町村へ増加して、この間に新たに南設楽郡や渥美郡でも織物工場が現れ、碧海郡や幡豆郡でも所在町村数は増加している。ほとんどの町村では1～2工場の所在にとどまるが、宝飯郡の三谷町で17工場、北隣の豊岡村で7工場、額田郡岡崎町で3工場を数える。ただし、職工数は785人から682人へ減少し、工場の分布範囲は広がっているものの、職工数の減少に伴って、分布図の上ではこの間にやや拡散した印象がある。しかし、その中であって宝飯郡では工場数、職工数とも増加しており、核となる三谷町から豊岡村へも綿織物工場が展開する状況を確認することができる。

(3) 1906年の状況

明治30年代後半に入ると、織物工場はふたたび増加の勢が増し、1906年には全県で286工場、職工数8,931人を数えるようになる(第8表)。原動機使用工場も増加して42工場を数えるが、なお、その全工場に占める割合は14.7%にとどまっている。織物工場は西加茂、東加茂、北設楽、八名の4郡以外の2市15郡(59町村)に展開するようになり、この5年間で急速な地域的展開を示している²⁰⁾。郡市別では中島郡の91工場、2,780人が最も多く、名古屋市で58工場、2,718人がこれに次いで、この2郡市が突出している。このほか、丹羽郡の22工場、431人、宝飯郡の22工場、335人、海東郡の20工場、475人、葉栗郡の19工場、459人、知多郡の15工場、543人が主なものである。中島郡を中心とする尾西地域の集積は県内他地域を圧倒している観がある。しかし、原動機使用工場では尾西地域全体でも6工場程度にとどまり、知多郡では14工場と同郡のほとんどの工場が原動機を使用している。同郡に続く名古屋市でも9工場にとどまり、西春日井、海東、幡豆の3郡で各3工場をみるほかは、まだ動力化が進展していない状況である。

織物種類別では、綿織物工場が204工場、6,048人と全体の3分の2以上を

第8表 愛知県の郡市別・織物種類別工場数・職工数（1906年）

	総 数		絹織物		絹綿交織		綿織物	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
愛知県計	286 (42)	8,931	21 (-)	426	38 (1)	1,503	204 (40)	6,048
名古屋市	58 (9)	2,718	- (-)	-	- (-)	-	52 (9)	2,601
愛知郡(3)	6 (2)	240	1 (-)	17	- (-)	-	4 (2)	208
東春日井郡(1)	1 (1)	73	- (-)	-	- (-)	-	1 (1)	73
西春日井郡(3)	3 (3)	96	- (-)	-	- (-)	-	3 (3)	96
丹羽郡(7)	22 (1)	431	13 (-)	211	1 (-)	19	8 (1)	201
葉栗郡(6)	19 (1)	459	3 (-)	72	6 (-)	173	7 (1)	125
中島郡(8)	91 (1)	2,780	1 (-)	34	31 (1)	1,311	49 (-)	824
海東郡(3)	20 (3)	475	- (-)	-	- (-)	-	18 (2)	365
海西郡(3)	5 (-)	124	- (-)	-	- (-)	-	5 (-)	124
知多郡(7)	15 (14)	543	1 (-)	55	- (-)	-	14 (14)	488
豊橋市	1 (1)	29	- (-)	-	- (-)	-	1 (1)	29
碧海郡(5)	8 (2)	174	1 (-)	22	- (-)	-	7 (2)	152
幡豆郡(6)	8 (3)	250	- (-)	-	- (-)	-	8 (3)	250
額田郡(1)	5 (-)	173	1 (-)	15	- (-)	-	4 (-)	158
南設楽郡(1)	1 (-)	12	- (-)	-	- (-)	-	- (-)	-
宝飯郡(4)	22 (-)	335	- (-)	-	- (-)	-	22 (-)	335
渥美郡(1)	1 (1)	19	- (-)	-	- (-)	-	1 (1)	19

注) 第6表に同じ。なお、1906年に豊橋町が市制施行して豊橋市となったほか、全县で大規模な町村合併が行われ、それ以前に比べて町村数が60%減少している。

出典)『愛知県勸業年報』（明治39年版）より作成

占め、これに次ぐ絹綿交織の38工場、1,503人を大きく引き離している。絹綿交織はこの5年間で25工場、428人も減少しているが、毛織物工場はまだ3工場205人とどまり、絹織物21工場426人にも遠く及ばない。綿織物工場は名古屋市に52工場2,601人が集中し、近接する愛知、西春日井2郡をあわせると、59工場、2,905人となって、県内綿織物工場の28.9%、職工数の48.0%を占めている。中島郡は49工場と名古屋市に次ぐが、職工数は824人と同市に比べて小規模な工場が多いことがわかる。このほか、海東郡、知多郡、宝飯郡が主要な集積地となっている。絹綿交織は中島郡に31工場、1,311人が集中し、近隣の葉栗郡と丹羽郡の3郡に立地が限られている。絹織物工場も丹羽郡に多く所在し、葉栗、中島を併せた3郡で大部分を占めている。毛織物の3工場は葉

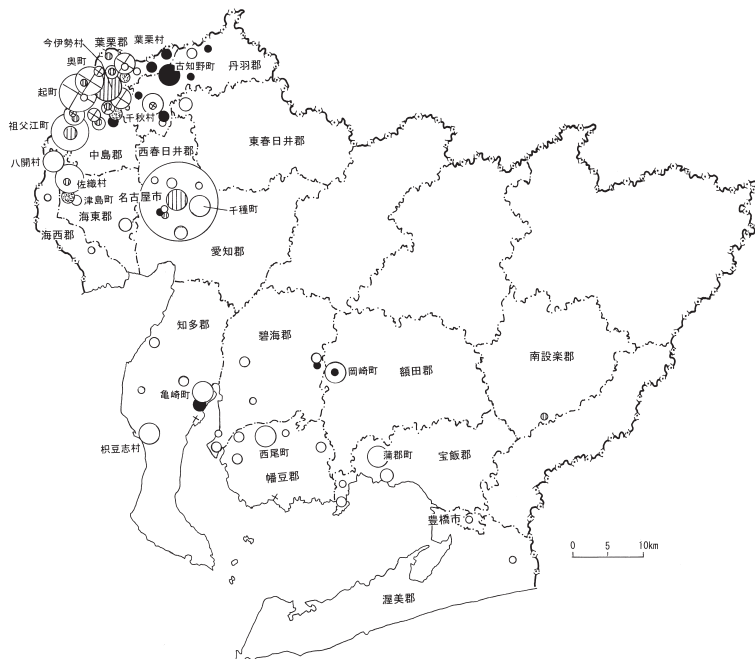
毛織物		その他	
工場数	職工数	工場数	職工数
3 (1)	205	20 (-)	749
- (-)	-	6 (-)	117
- (-)	-	1 (-)	15
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
1 (-)	35	2 (-)	54
1 (-)	71	9 (-)	540
1 (1)	99	1 (-)	11
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	1 (-)	12
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-

栗、中島、海東の3郡に所在している。原動機使用工場の大部分は綿織物工場で、絹綿交織と毛織物に各1工場をみるのみである。郡別でみると、知多郡の綿織物工場14工場はすべて原動機を使用しているが、他郡市では綿織物工場を含めて原動機の導入はあまり進展していない。

町村別分布をみると(第3図)、尾張西部における織物工場の分布範囲が周辺部に向かっても広がり、丹羽郡から海西郡にいたる広範囲に工場が展開している。中心をなす中島郡からみると、祖父江町の41工場、679人が最大の集積で、これに起町の18工場、653人が次いでいる。職工数ベースでみると、今伊勢村の399人、奥町の331人、一宮町の235人などが多く、同郡で織物工場の所在する8町村すべてが職工数合計で100人を超えている。

織物種類別では同郡の綿織物工場のうち、39工場、624人が祖父江町に集中しており、近隣の朝日村(5工場116人)や萩原町(4工場62人)、さらに海東郡佐織村(13工場275人)などと併せて、綿織物工場の大きな集積をつくり出している。絹綿交織工場は起町に17工場、631人が集中しており、近隣の一宮町(5工場235人)や奥町(3工場303人)などとともに大きな集積をなしている。中島郡の毛織物工場は荊安賀村の1工場のみである。

周辺の葉栗郡では上述の葉栗村が絹綿交織を主体に7工場、191人を数え、西隣の黒田町の7工場、152人とともに同郡の工場生産の中心をなしているが、黒田町では綿織物工場(5工場90人)が主体となっている。丹羽郡では郡の東部から北部にかけて絹織物工場が多く展開する一方、中島郡に近い地域では



第3図 愛知県における織物工場職工数の市町村別分布（1906年）

注）×印は職工数不明の織物工場が、当該1工場のみ所在する町村を示す。
 資料）『愛知県勸業年報』（明治39年版）所収「工場表」より作成

綿織物工場が多い。絹織物工場分布の中心は古知野町（7工場128人）にあり、綿織物工場分布の中心は千秋村（7工場191人）にある。このほか、岩倉町でも4工場、55人を数えるが、主体は絹織物である。中島郡の南に広がる海東郡と海西郡では、上述の佐織村に14工場、286人（その他を含めて）を数え、海西郡八開村（3工場101人）とともに綿織物工場の大きな集積をなしている。その南の津島町にも綿織物工場（2工場30人）をみるが、むしろここは原動機を使用する毛織物工場（1工場99人）の存在が目立っている。海東郡南部の富田村にも綿織物工場（3工場60人）をみるが、尾西地域の分布域とみるよりも、名古屋市周辺の位置づけに近い。

一方、名古屋市とその周辺部では、同市の綿織物工場（52工場2,601人）が大きな集積をなし、愛知郡愛知町、熱田町、千種町に綿織物工場を主体とする

織物工場が所在している。名古屋市内には合資会社愛知物産組織工場（550人）、や愛知織物合資会社（323人）などの大規模工場があり、同市工場の平均職工数規模を大きくしている。また、西春日井郡の西枇杷島町、六郷町、金城村といった名古屋市に近接した町村にも綿織物工場の展開をみている。東春日井郡小牧町の綿織物工場は同郡北部の丹羽郡に近い立地であり、名古屋市周辺部という位置づけではない。他方、知多郡では同郡北部での織物工場の分布にややまとまり感が現れ、亀崎町の7工場、318人や枳豆志村の4工場、115人が主な集積地となっている。このほか、阿久比村、岡田町、三和村、八幡村に織物工場をみるが²¹⁾、亀崎町の絹織物工場（1工場55人）を除いて、すべて綿織物工場である。

最後に三河地方をみると、碧海郡から幡豆郡にかけての11町村に綿織物工場が展開し、西尾町の3工場、105人を中心に両郡にまたがる近接町村に分布のまとまりがみられつつある。また、碧海郡矢作町（2工場59人）は矢作川を挟んで額田郡岡崎町（5工場173人）とひとまとまりの織物工場分布を示している。両町とも絹織物工場各1工場を含むが、綿織物が主体をなしている。また、宝飯郡には三谷町を中心としたまとまりがあったが、同町は7工場、99人とやや集積規模が縮小し、旧豊岡村を合併した蒲郡町が11工場、177人とその規模を大きくしている。さらに形原村や西浦村など三河湾に面した村々に分布が広がりつつある。東海道に沿った二川町や豊橋市にも織物工場が現れているが、小規模で地域的なまとまりはない。三河地方では岡崎町などがあるとはいえ、東海道沿いに織物工場の展開はほとんどなく、矢作川下流域の西三河平野部や三河湾沿いの地域における綿織物工場の地域的展開が目につき、むしろ知多地方を含めた、やや広域にわたる弱いまとまりを想起させるものがある。

(4) 1911年の状況

明治40年代に入ると、全国的にも急速な織物工場の増加がみられるが、愛知県の場合も同様に織物工場は急増し、1910年はいったん減少するものの、1911年にはふたたび増加して、全県で550工場、16,530人を数え、明治期最大となっている（第9表）。原動機使用工場もこの間に252工場へ増加し、その

第9表 愛知県の郡市別・織物種類別工場数・職工数（1911年）

	総数		絹織物		絹綿交織		綿織物	
	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数	工場数	職工数
愛知県計	550 (252)	16,530	42 (3)	1,286	100 (3)	2,709	369 (241)	10,019
名古屋市	113 (13)	4,700	10 (-)	650	45 (-)	1,168	49 (11)	1,547
愛知郡(7)	13 (6)	587	- (-)	-	3 (1)	175	10 (5)	412
東春日井郡(1)	1 (1)	94	- (-)	-	- (-)	-	1 (1)	94
西春日井郡(5)	13 (9)	376	- (-)	-	- (-)	-	13 (9)	376
丹羽郡(7)	45 (20)	1,355	17 (2)	330	2 (-)	37	26 (18)	988
葉栗郡(5)	21 (2)	490	11 (-)	237	2 (-)	39	5 (2)	183
中島郡(9)	95 (7)	2,766	2 (-)	39	47 (2)	1,260	24 (4)	520
海東郡(4)	20 (5)	491	1 (-)	15	1 (-)	30	16 (4)	294
海西郡(4)	4 (1)	79	- (-)	-	- (-)	-	2 (1)	40
知多郡(26)	122 (120)	3,008	- (-)	-	- (-)	-	122 (120)	3,008
豊橋市	4 (4)	96	- (-)	-	- (-)	-	4 (4)	96
碧海郡(8)	24 (18)	644	- (-)	-	- (-)	-	24 (18)	644
幡豆郡(7)	21 (10)	672	- (-)	-	- (-)	-	21 (10)	672
額田郡(8)	34 (26)	818	1 (1)	15	- (-)	-	32 (24)	791
宝飯郡(6)	17 (7)	278	- (-)	-	- (-)	-	17 (7)	278
渥美郡(2)	3 (3)	76	- (-)	-	- (-)	-	3 (3)	76

注) 第6表と同じ。

出典) 『愛知県統計書』(明治44年版) より作成

全工場に占める割合も45.8%まで上昇している。織物工場は西加茂、東加茂、北設楽、南設楽、八名の5郡を除く、2市14郡(99町村)に展開しているが、なかでも、知多郡における工場の増加とその地域的展開が顕著である。郡市別では名古屋市の113工場、4,700人²²⁾と知多郡の122工場、3,008人が双璧をなし、中島郡の95工場、2,766人がこれらに次ぎ、丹羽郡の45工場、1,355人、額田郡の34工場、818人がこれに続いている。

原動機使用工場は知多郡に120工場が集中し、同郡の織物工場はほとんどが原動機を使用している(動力化率98.4%)。額田郡の26工場(同76.5%)、丹羽郡の20工場(同44.4%)、碧海郡の18工場(同75.0%)がこれに次ぎ、三河地方の工場の動力化が比較的よく進んでいる。これに対して、名古屋市の13工場(11.5%)や中島郡の7工場(7.4%)など、知多郡を除く尾張地方の動力化

毛織物		その他	
工場数	職工数	工場数	職工数
18 (2)	1,154	21 (3)	1,362
2 (-)	275	7 (2)	1,060
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	3 (-)	31
12 (1)	688	10 (-)	259
2 (1)	152	- (-)	-
2 (-)	39	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	1 (1)	12
- (-)	-	- (-)	-
- (-)	-	- (-)	-

はまだあまり進展していない。原動機の使用状況をもう少し詳しくみると、使用工場252工場、原動機台数は271台、合計馬力数は2,539馬力で、1台あたり平均馬力数は9.4馬力と小出力の利用にとどまっている。原動機の種別では石油発動機が127台(47.9%)と最も多く、蒸気機関(蒸気タービンを含む)が48台(17.8%)、瓦斯(ガス)発動機が44台(17.0%)、水車が20台(7.7%)、電動機が17台(6.6%)となっている。石油発動機が利用の中心であるが、1906年では瓦斯発動機の利用がまったくなかったため、この間に瓦斯が急増したことがわかる。また、水車の利用も1906年には1台のみであったため、この間にその利用が増加しているが、すべて三河地方での利用で、幡豆郡の1台を除い

て、すべて額田郡での利用である。

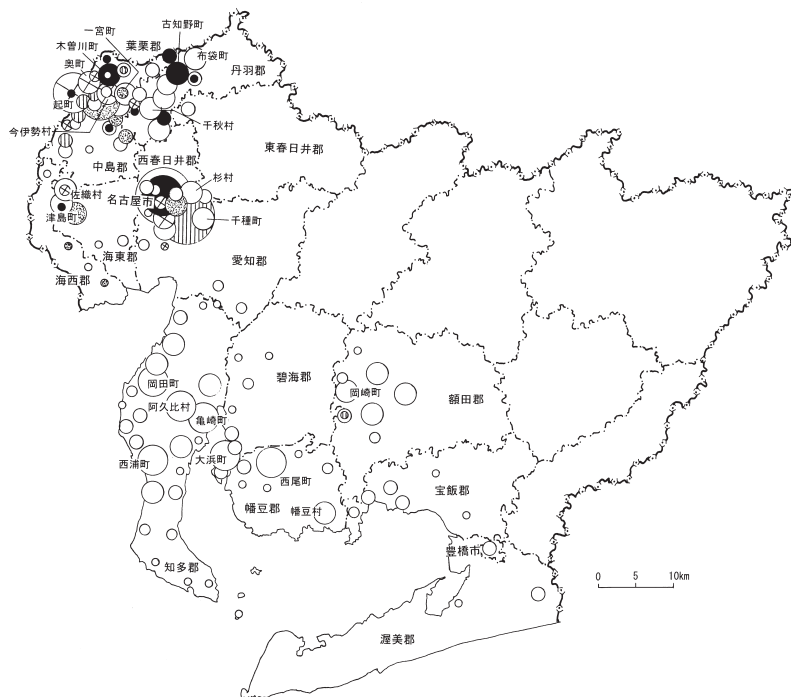
織物種別でみると、全体の67.1%に当たる369工場が綿織物工場で占められ、職工数でも綿織物が60.6%を占めて他を圧倒している。これに絹綿交織の100工場、2,709人が次ぎ、絹織物工場(42工場1,286人)、毛織物工場(18工場1,154人)となっているが、いずれも1906年に比べて増加しているものの、綿織物以外は生産地域がほぼ特定郡市に限定されている。原動機使用工場も綿織物工場(241工場、動力化率65.3%)に集中しており、他の織物が各2~3工場にとどまっていることと好対照をなしている。綿織物工場の郡市別分布をみると、知多郡に122工場、3,008人が集中して最大の集積地をなし、同郡の全町村数28町村のうち、26町村に工場が立地するに至っている。しかも、そのほとんどが原動機使用工場である。名古屋市の49工場、1,547人がこれに次

ぐが、原動機使用工場は11工場にとどまっている。工場数では額田郡の32工場、丹羽郡の26工場、中島郡と碧海郡の24工場が続いており、職工数では丹羽郡の988人、額田郡の791人、幡豆郡の672人、碧海郡の644人が続いている。つまり、綿織物工場は知多郡と名古屋市を別にすれば、尾西地域と三河地方諸郡との間に大きな差は存在しない状況がみてとれる。

絹綿交織は中島郡に47工場、1,260人、名古屋市に45工場、1,168人が集中して、他はこれらの周辺に数工場をみるのみである。絹織物工場は丹羽郡の17工場、330人と葉栗郡の11工場、237人が大きな集積をなすが、名古屋市が10工場、650人と職工数で大きな集積を示している。毛織物工場は中島郡の12工場、688人と集積度が高まりつつあり、それ以外では名古屋市、海東郡、海西郡に各2工場をみるにとどまっている²³⁾。上述のように、これらの織物では、特定の郡市に工場生産が収斂する傾向が見られ、綿織物工場の広範な展開とは対照的である。

町村別にみると（第4図）、全体として各生産地域とも織物工場の分布範囲の拡大、職工数規模の増大がみられるが、製造品目ごとの分布状況からは、産地ごとの機能分化が現れつつあることがうかがえる。まず、最大の織物産地を形成している尾西地域からみていこう。丹羽郡から海西郡までを合わせると、185工場、5,181人の工場生産規模をなす尾張西部は、その中心部中島郡の9町村に織物工場が所在するが、全体とすれば、1906年に比して大きな増減はないものの、綿織物が工場数、職工数とも減少するなかで、絹綿交織工場および毛織物工場の増加が目立ち、とくに毛織物が相対的な重要度を増してきている。なかでも、起町が43工場、1,260人と中心的な位置に立ち、織物種類別では絹綿交織が28工場、599人、毛織物が9工場、509人を占めている。これに一宮町の17工場、381人（絹綿9工場209人、綿7工場124人、毛1工場48人）、今伊勢村の10工場、288人（絹綿5工場194人、綿2工場30人、他3工場64人）が次いでいる。以下、祖父江町（7工場159人）、奥町（4工場215人）などが続くが、郡南部の祖父江町などを中心とした地区では綿織物が依然として中心をなすものの、その規模は縮小している。

丹羽郡はこの間に工場生産規模が拡大し、45工場、1,355人となっているが、



第4図 愛知県における織物工場職工数の市町村別分布（1911年）

資料）『愛知県統計書』（明治44年版）所収「工場表」より作成

その中心は古知野町の16工場、346人で、絹織物工場（13工場228人）が主体をなしている。職工数規模では布袋町（5工場267人）と千秋村（7工場224人）がこれに次いでいるが、両町村とも綿織物工場のみである。岩倉町や西成村では絹織物と綿織物、あるいは絹綿交織工場が入り交じっている。葉栗郡では木曾川町に12工場、200人が集中し、その主体は絹織物（7工場118人）である。郡東部の草井村では絹織物工場（3工場97人）のみであるが、葉栗村（3工場93人）や宮田村では綿織物工場が中心である。中島郡より南の海東郡、海西郡では合わせて24工場、570人となって、1906年よりわずかに減少しているが、海東郡佐織村（9工場147人）や海西郡八開村（1工場25人）の綿織物工場が減少した一方で、海東郡津島町（6工場283人）の毛織物と綿織物で工場生産が伸びている。また、両郡南部にも毛織物工場や綿織物工場が展開する

ようになっている。

名古屋市とその周辺部では綿織物工場が主体をなし、とくに周辺の愛知郡や西春日井郡の町村では大部分が綿織物工場で占められ、名古屋市から周辺の町村に向かって織物工場の分布範囲は拡大している。名古屋市では絹綿交織が綿織物に次ぐが、注23)で示した愛知織物合資会社の製造品目の扱いによっては、絹織物、綿織物、毛織物の職工数規模が大きく増減することになり、ここでは「その他」に含めている。

知多郡はこの間に最も急速な織物工場の展開を示し、工場数、職工数の増加とともに、郡内のほとんどの町村に織物工場が現れている。主だった町村をみると、阿久比村の26工場、426人を筆頭に、亀崎町の11工場、406人、西浦町の15工場、358人、岡田町の7工場、328人、成岩町の12工場、254人が職工数200人を超え、このほか、東浦村、八幡村、横須賀町、小鈴谷村で職工数が100人を超えている。これらはすべて綿織物工場で、常滑町と豊浜町の各1工場を除く、その他すべての工場が原動機を使用している。知多郡の綿織物生産は、白木綿を主体としたものであり、大阪府の泉州地方と並んで、白綿布の大規模産地を形成している。力織機の導入はこの知多郡で急速に進み、ここでの綿織物生産が、愛知県内の綿織物生産をリードする状況が生じている。

最後に三河地方をみておこう。一部に絹織物工場などがみられるが、同地方の織物工場はほぼ綿織物工場が占めている。生産の中心は西三河の額田、碧海、幡豆3郡に移り、この3郡23町村で79工場、2,134人を数えている。1906年までかなりの集積を示していた宝飯郡では、三谷町や蒲郡町の集積度が下がり、三河湾沿岸諸町村に織物工場が展開するようになっている。西三河3郡をまとめてみると、職工数規模では幡豆郡西尾町の8工場、420人が最大で、これに碧海郡大浜町の12工場、321人、額田郡岡崎町の10工場、247人が続いている。このほか、幡豆郡幡豆村（5工場112人）と額田郡の美合村（4工場137人）、常磐村（5工場124人）、岡崎村（2工場105人）、河合村（7工場100人）で職工数が100人以上となっている。この美合村、常磐村、河合村ではすべて水車を原動力とした綿織物工場で、岡崎町を取り囲む村々である。第4図をみると、碧海郡北西部は知多地方の分布域の拡大ともみられるが、同郡

大浜町から幡豆郡西尾町にかけては一つの地域的なまとまりを示している。また、岡崎町を中心とする工場群もみてとれ、幡豆郡幡豆村から宝飯郡の三河湾沿岸にかけても弱いまとまりとみることができるが、東三河の豊橋市や二川町などの織物工場の分布はなお地域的なまとまりをなしているとはいえない。

5. おわりに

本稿では「個別工場一覧」によりながら、明治期における愛知県内の織物工場の分布動向を、郡市別、町村別に詳しく分析してきた。ここではその分析結果をまとめるとともに、今後の検討課題についても触れておこう。

まず、明治期の愛知県に関する「個別工場一覧」の資料吟味を行い、「県統計書」に掲載された織物業の項目に属する工場（職工数10人以上）の集計値を、『工場通覧』および農商務統計様式に基づく既存の機業統計と照合した。初期の愛知県刊行資料では、若干工場の把握の程度が低い点もあるが、ほぼ『工場通覧』並の工場捕捉を行っていると思われる。資料的な価値は高いと判断できる。ただし、1906年以前の資料にあつては原動機に関する表記が不足しているという制約がある。

そうした資料吟味の上で、愛知県内の織物工場の展開状況を郡市別に整理した結果、明治後期の工場生産の動向は、時の経済事情等を反映して増減を繰り返すものの、明治末年に向かって急速に増加する傾向を示していることが確認できた。基本的な傾向は既存の機業統計、織物生産統計で示されているものと同様の結果である。そして、地域的には尾西地域を核とする尾張西部の諸郡、名古屋市とその周辺部の諸郡、知多郡、三河地方の平野部諸郡に、それぞれの地域の産地特性を反映した織物工場群が出現してきていることも確認された。そうした特性は町村レベルの分布動向の分析によって、さらに以下のような詳細な地理的諸相をもつことが明らかになった。

尾張西部では中島郡を核としながらも、起町（旧三条村を含む）を中心とする郡北部での絹綿交織工場の集中的な展開が認められた。しかし、祖父江町を中心にしてそれより南の地域では綿織物工場を中心とした展開がみられ、その範囲は海東郡および海西郡北部の諸村に及んでいる。一方、中島郡より北では葉栗

郡西部で絹綿交織工場が、同東部から丹羽郡にかけて絹織物工場が展開し、尾張西部の地域分化が織物工場の分布からも明瞭に確認できた。他方、知多郡は白木綿を中心に綿織物工場が展開し、とくに明治40年代に原動機を使用する、すなわち、力織機を導入した綿織物工場が、郡のほぼ全域に急速に展開した様子が明らかとなった。明治期にあつては、毛織物工場はまだそれほど展開していないが、尾西地域や津島町、名古屋市などに工場の集積が始まっている。

名古屋市とその周辺部では、原動機を使用する会社組織の大規模工場が展開する一方で、絹綿交織などの小規模工場も、動力化しないまま相当数現れていた。地理的には名古屋市内に集中し、明治末に向かうにつれて、周辺の愛知郡、西春日井郡の名古屋市に近接した諸町村へ織物工場の分布が拡大している様子がみてとれた。なお、少なくとも明治期にあつては、東春日井郡は北部の小牧町に織物工場が現れるのみで、地域的には名古屋市の周辺部というよりも丹羽郡など尾張西部との関連が強いことが明らかとなった。

三河地方では、当初、宝飯郡三谷町での綿織物工場の展開がみられ、大浜、西尾、岡崎などを核に分散的な綿織物工場の展開であったが、碧海郡から幡豆郡にかけては織物工場の分布にまとまり感が出始め、岡崎を中心としたまとまりと合わせて、西三河の平野部を中心に、明治末には綿織物工場が相当数展開する様子が確認できた。ここでは知多地方ほどではないが、尾張西部よりも工場の動力化（水車利用を含めて）が進んでいることも明らかとなった。

以上のように、明治期愛知県における織物工場の展開が確認されたが、毛織物工場の本格的な展開は大正期以降のことであり、まずは大正期以降の織物工場の地理的諸相の分析がつぎの課題として上げられる。また、本研究では愛知県をベースとするものの、尾西地域での織物工場の展開は、木曾川対岸の岐阜県西濃地方における織物業との関係性を無視できない。さらに、こうした織物工場の創業者がどのような階層に属し、どのような契機で工場経営に参入するようになったのか。その際の当該地域の社会経済事情や自然的特性がどのように関連していたのか。既存の研究成果を踏まえつつも、新たな視点からこれらの課題をとらえ直していく必要がある。まさに研究の前途は遼遠というべきか。

注

- 1) 拙稿 (2011) 「明治大正期愛知県下織物生産の統計的分析」『愛知県立大学日本文化学部論集 (歴史文化学科編)』2、pp. 1-32
- 2) 愛知県内の地域名称については、ここでは旧尾張国を尾張地方、旧三河国を三河地方とよぶ。尾張地方内については、尾西、尾北などさまざまな呼称があるが、本稿では原則として、尾西地域という場合は現在の一宮市を中心とした範囲を指し、互いに隣接する丹羽、葉栗、中島、海東、海西の5郡を「尾張西部」とよぶ (工場分布の実態に即して、海西郡を除く4郡で論じる場合も同一呼称を用いる)。知多郡は郡名のまま、もしくは知多地方とよぶ。名古屋市、愛知郡、西春日井郡は「尾東」の名称は用いず、織物工場の分布実態に即して、「名古屋市とその周辺部」とよぶ。三河地方については、碧海、幡豆、額田、西加茂、東加茂5郡の領域を「西三河」、北設楽、南設楽、宝飯、渥美、八名5郡の領域を「東三河」とよぶ (豊橋市を含む)。なお、経済史等の既存の研究成果で用いられている呼称は、ここでは言い換えずにそのままの呼称を踏襲する。
- 3) 農商務省工務局 (1925) 『織物及莫大小に関する調査』、工政会出版部
- 4) 林英夫 (1960) 『近世農村工業史の基礎過程—濃尾綿木綿織物史の研究』、青木書店、また、同上 (1960) 「尾西と西濃の織物業」 (地方史研究協議会編『日本産業史大系5 中部地方篇』、東京大学出版会、pp. 26-53、所収)
- 5) 塩沢君夫・川浦康次 (1957) 『寄生地主制論』、御茶の水書房、また、塩沢君夫・近藤哲生編 (1985) 『織物業の発展と寄生地主制』、御茶の水書房
- 6) 川崎敏 (1964) 「産業革命期の尾西機業地域」『産業革命期前後の歴史地理 (歴史地理学紀要6)』、日本歴史地理学研究会、pp. 41-60、同上 (1965) 「一宮機業地域における労働力吸引圏に関する地理学的研究」『市邨学園短期大学開学記念論叢』、市邨学園短期大学、pp. 255-328、同上 (1967) 「尾西毛織物工業地域の形成—大正・昭和初期—」『社会科学論集』、市邨学園短期大学社会科学研究会、pp. 1-39 など
- 7) 一宮市編 (1977) 『新編一宮市史 本文編 下』、一宮市
- 8) 尾西市史編さん委員会編 (2008) 『尾西市史 通史編 上巻』尾西市役所
- 9) 森徳一郎編 (1939) 『尾西織物史』、尾西織物同業組合、三河繊維振興会編 (1975) 『三河繊維産地の歴史』、三河繊維振興会などを挙げることができる。
- 10) 拙著 (2001) 『綿工業地域の形成—日本の近代化過程と中小企業生産の成立—』、大明堂
- 11) 本稿で取り上げる「工場」とは、これまでの拙稿と同様に、原動機使用の有無を問わず、「個別工場一覧」に記載をみるすべての織物工場を対象としている。
- 12) 拙稿 (2013) 「明治期愛知県の市町村再編について」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 (日本文化専攻編4)』14、pp. 1-26
- 13) 1909 (明治42) 年は第1回『工場統計表』調査の実施年にあたり、職工数5人以上を対象とする『工場統計表』の調査票データが『工場通覧』に流用されたため、この年次だ

け対象となる工場の職工数規模が異なっている。

- 14) ただし、大正期における大阪府和泉地方の織物工場の動向からは、10人未満規模の「工場」はそれほど多くはなく、白木綿など力織機の利用による大量生産向けに特化した織物産地では、10人規模（力織機台数にして30台以上）が工場経営の下限に当たっていたことを指摘したことがある。この点は愛知県においては尾西地方よりも、知多地方の分析を待つ必要がある。前掲10)、p. 178参照。
- 15) 織物種類別集計に当たって、複数種類の織物を製造する工場の場合は、原則として製造品目欄の筆頭にあげられている品目の種類をその工場の製造品目とみなして整理した。また、絹綿交織物以外の交織物が筆頭の場合、毛織製品の交織物は原則として毛織物とみなし、たとえば、綿毛交織は毛織物へ分類した。数は少ないが、麻織製品の交織物はその他へ含めた。その他に含まれる工場の多くは、製造品目欄が単に「織物」や「織布」となっていたり、特殊な品目名の場合や「縞製品」などと表記されて、織物種類が特定できない事例である。なお、品目名が「結城織」となっている場合、この時期の尾西地方の一般的事例に従って、絹綿交織物に分類している。
- 16) たとえば、三重紡績株式会社愛知分工場は名古屋市内で操業しているが、生産状況によって、紡績部門の方が多く年と織布部門の方が多く年とがあり、織布部門の生産額が多かったと思われる1907年は織物業に含められているが、同年以外は紡績業に含まれている。同工場の1907年の職工数は1,800余人で、この1工場を織物業に含むか否かで名古屋市の職工数規模が大きく変動することになる。
- 17) 奥町にはこのほかに職工数10人未満のもの（8人）が1工場、個別工場一覧に記載されているが、ここでは集計には含めていない。
- 18) 太田島村にはこのほかに職工数10人未満のもの（7人）が1工場、個別工場一覧に記載されているが、ここでは集計には含めていない。
- 19) 津島市に本拠を置いたわが国最古の毛織物製造会社、片岡毛織株式会社の最初期の姿である。同社資料では1898年3月の創業、創業者は片岡春吉と彼が婿養子として入った先の義理の父親、片岡孫三郎で、孫三郎が工場主、春吉が工場長となっており、「個別工場一覧」での表記も片岡孫三郎名義である。片岡毛織創業九十年史編纂委員会編（1988）『片岡毛織九十年史』、片岡毛織株式会社、p. 27
- 20) 1906年の59町村は1901年の56町村と大差なくみえるが、愛知県では1906年に大規模な町村合併が行われ、前年までの667町村が265町村に整理統合されている。約6割の減少で、各郡とも町村数が大幅に減っているため、1901年との単純な比較はできない。なお、同年に豊橋町が周辺村を含めて市制施行し豊橋市となっている。注12)の拙稿参照。
- 21) 半田町（9人）と阿久比村（8人）には職工数10人未満の綿織物工場各1工場をみ、阿久比村のそれは原動機使用工場であるが、集計値からは除かれている。
- 22) 名古屋市は1908（明治41）年から区制を実施し、中区、西区、東区、南区の4行政区

を設けているが、本稿では1911年についても市の集計値のみの扱いとする。なお、名古屋市の織物工場の大部分は中区に集中しており、区ごとに示せば、中区が80工場、2,455人、西区が18工場、876人、東区が14工場、1,138人、南区が1工場、231人である。

- 23) 名古屋市東区豎代官町の愛知織物合資会社（1890年創業、職工数560人）は、製造品目が1911年については「黒八丈、白八重、セル地」となっており、1908年以降毛織物の製造を行っているようであるが（ただし、表記されているセル地は「綿セル」の可能性もある）、筆頭品目ではないため、毛織物工場には含めていない。